

イタリア国際障害者柔道大会

柔道で肢体不自由を克服

9月12・13日、イタリア・ヴェネチアで開かれたイタリア国際障害者柔道大会に、アルベルト大会委員長の招待で、大阪の「社会福祉法人わらしべ会」重度身体障害者更生援護施設わらしべ園の相原牧也(26歳)、久保田達哉(26歳)、今井博文(35歳)の3選手が参加した。

参加国はイタリア、ドイツ、フランス、日本の4カ国で20チーム、100名の障害者が集まった。わらしべ園入所者の3選手は、いずれも脳性麻痺、四肢機能障害の重度身体障害者。引率は村井正直理事長に指導員の辻和也、長野吉孝両氏で、大会の模様を久保田選手の試合を例として村井理事長は次のように伝える。

一生懸命なプレイに 称賛の言葉や拍手

歩行のままならぬ久保田選手は、試合場呼び出されると座位のままりこえて活発に技をしかけてくれたので、知恵遅れの選手たちには、極めてよい刺激になったと喜んでくれた。

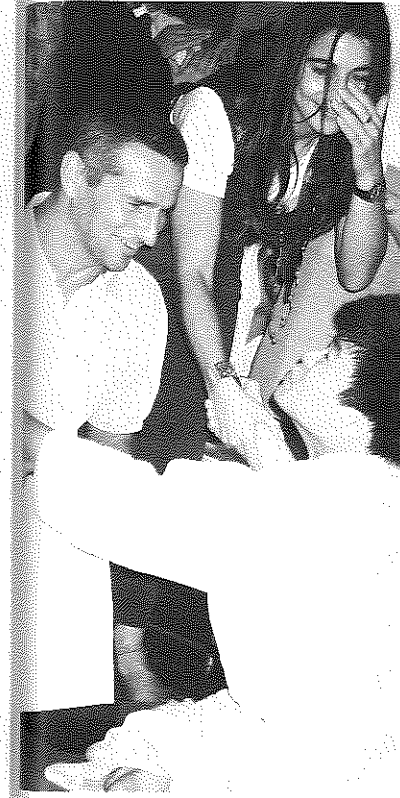
長年のわらしべ園の 柔道療育の一つの成果

今回日本から参加した障害者は大阪にある、重度身体障害者更生援護

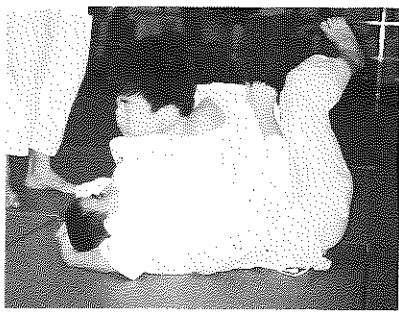
で所定の位置について礼をかわし、試合が開始された。久保田選手は巨体のイタリア女性選手を寝技にひきこむ。女性は腹臥位になって防御す



柔道で国際交流



多くの人から温かい励まし



る。久保田選手は一瞬早く女性の肘と膝をとって背臥位にして抑え込むと、会場から驚きの歓声があがり、盛んな拍手に変わった。巨体の彼女は2度、3度と久保田選手をはねかえしたが、最後には横四方固めにきちんと押さえ込んで一本をとった。今井選手も相原選手もほぼ同様の試合運びで試合が終わった。表彰式で日本の3選手が会長からメダルを受

けると、会場を埋めた約200人の見学者や選手たちから割れるような称賛の言葉や拍手が沸いた。握手を求め、戦った各国の選手たちからもあついキスをもらって、3人は戸惑っていた。

言葉が通じる筈はないが、柔道を媒介としたBody Languageは、実に見事な会話の役目を果たした。道衣一枚の隔壁で技を競い合った者だけが感得できる醍醐味であろう。

アルベルト大会委員長は3つの道場の指導者で、東海大、天理大で柔道を修行した経歴の持ち主。Judo's Education)をモットーに、障害者に柔道を練習させているといい、近年の日本が失っている嘉納柔道をイタリアの地で花咲かせている数少ない真の柔道家であるように思う。

特筆すべきことは、この大会に参加した3カ国の選手はすべてが知恵遅れの方々であり、日本からでかけた3人は、肢体不自由者であった。

アルベルト会長の話では、知恵遅れ同士の試合では双方が非積極的であるため、試合に活気のある動きが展開できにくいという悩みがあったが、日本の3人は肢体の不自由をの

施設わらしべ園の入所者。わらしべ園では、1981年の開設当初から、創設者である医師村井正直氏の指導のもと、肢体不自由を克服するための課題のひとつとして柔道をとりに入ってきた。参加している入所者はそこで柔道の技のみならず、対人関係や社会性を学んで、日常生活を活性化させていった。

彼らが試合中元気よく、また思いのほか上手に身体を動かすのを目のあたりにしたアルベルト氏が「信じられない!」を繰り返して、各国指導者からも驚嘆の声が寄せられたのは、長年のわらしべ園での柔道療育のひとつの成果といつてよい。

所者が帰国後「黒帯をとりたい」と言ってきた。昇段試験を目標に一層稽古に励み、彼らの存在を社会にアピールできたなら、素晴らしいことだと思ふ。それは国際障害者年の「完全参加と平等」のスローガンに大きく一歩近づくことになる。

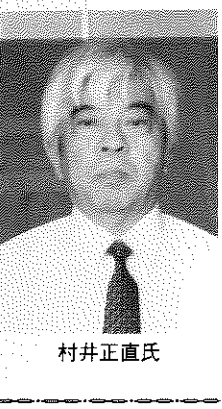
村井理事長は障害者が行う柔道のポイントを次に述べている。

①「1、2、3」と声を出して受け身をする。これは意図とリズムを結びつけ、行為に促進をもたらす(リズムミカル・インテンション)という。

②顎を引いて後頭部を畳から挙上する受け身の練習の繰り返しは、尖足の強い障害児にとって運動生理学的促進行為となる。

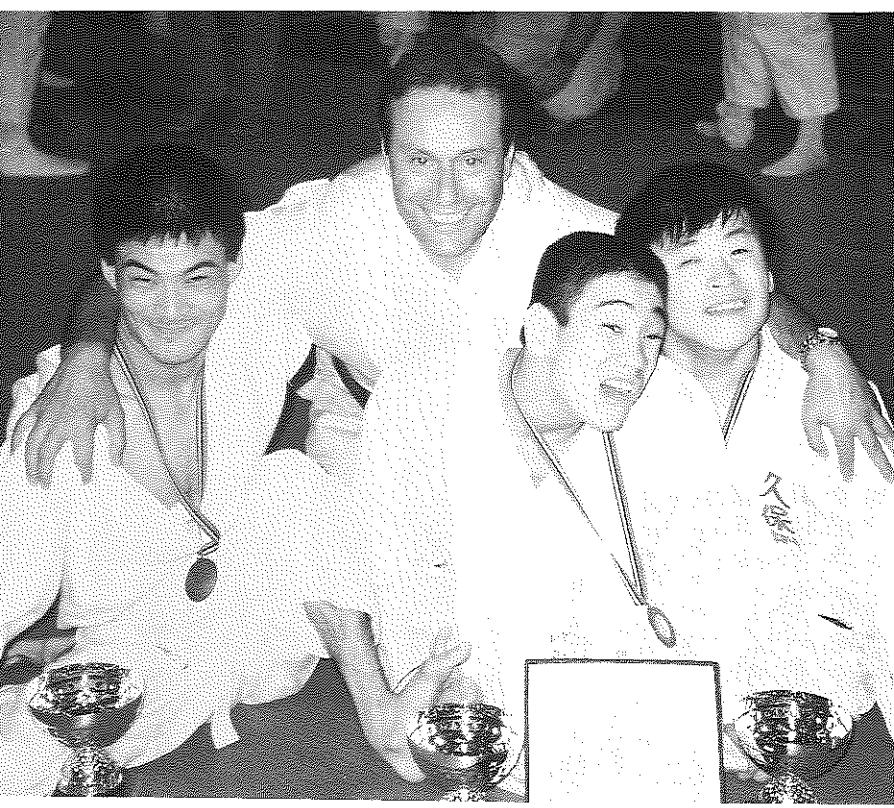
③競争心が起り諸動作改善の動機づけ(モチベーション)として有効有用である。

④けさ固めを返されないようにするには、両下肢を股関節部で90度に開脚する必要に迫られるし、毎日「1、2、3」と声を出して技の打ち込みを行うことで、リズムよく肢体の柔軟性と安定性を獲得できるという運動療法としての効果を確認してきた。



村井正直氏

今回参加した1人はイタリア行きが決まってから「あいさつをきちんとする、身の回りの整理整頓、食事マナーの向上」など、生活の目標を自分の部屋に貼り出し、食べこぼしを減らそうと心がけるなど日常生活面でも極めて顕著な変化がみられた。パスポートの手続きに行ったのも本人たちだった。こうした取り組みは彼らにとって、恵まれた社会勉強となり、自主性を育てる上で有効だった。「連れて行ってもらう」のではなく「自分が行く」という意識が芽生えた。



喜びの表情

心技体 人づくりをめざす総合誌

武道

武道活性化特集

学校武道を考える

カラーグラフ

色紙に書く座右の銘

好評連載

父性を生かす人づくり——(最終回) 林 道義

子どもの心をよみ、立派に育てる—— 菅野 純

人生を豊かに生きるための知恵—— 新福尚武

現代における武道の実用性と実益——(最終回) 野中 日文

生命拡充へ向かう武道——(最終回) 時津賢児

武の素描——(最終回) 大保木輝雄

将棋名人「羽生善治」——(最終回) 湯川博士

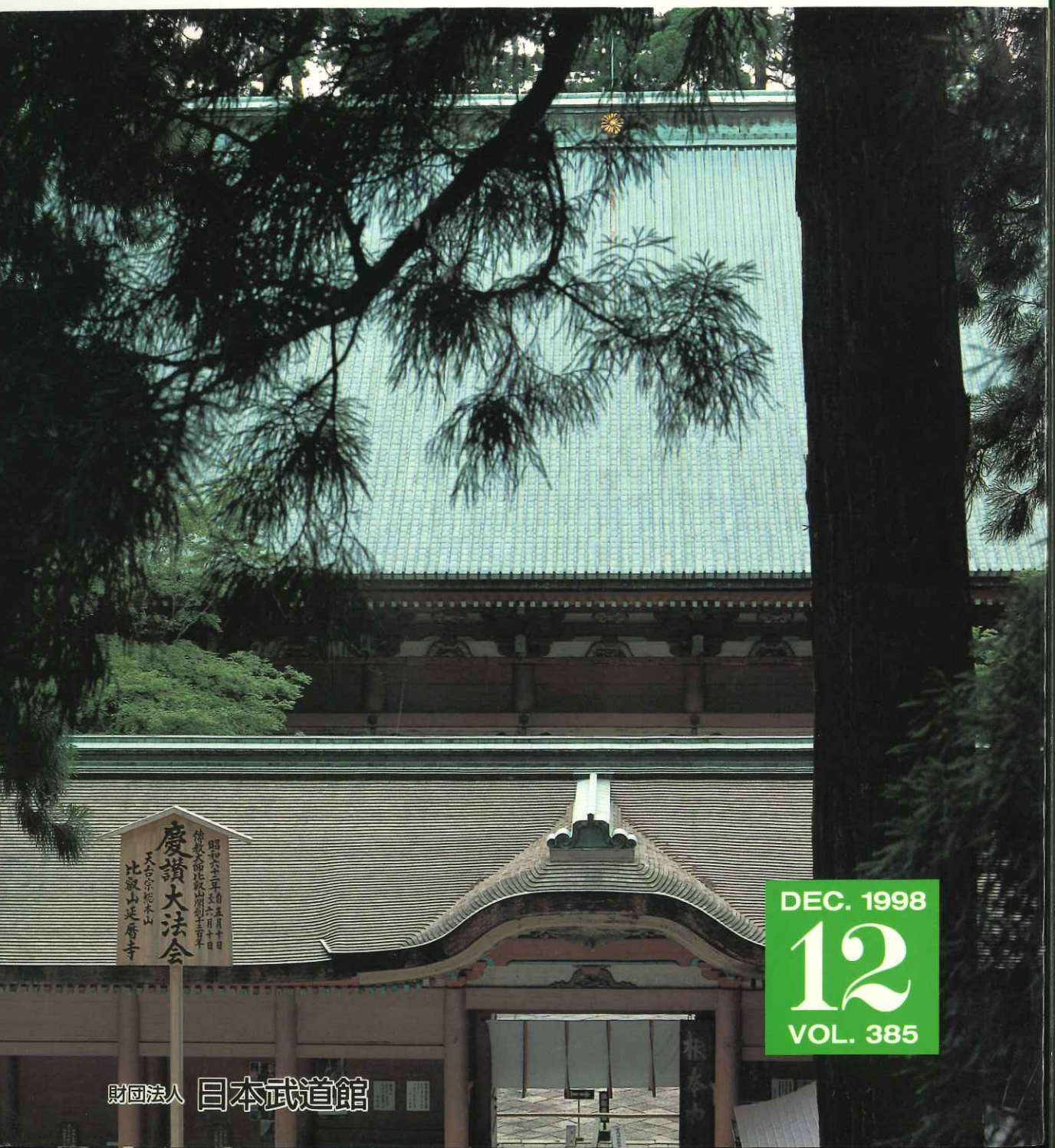
武道・まんがスケッチ——(最終回) 田代しんたろう

合気道の理念と技術特性

高校剣道 部活動

全日本剣道選手権大会

武安義光



DEC. 1998

12

VOL. 385